喜光寺

721 年、行基（668-749）菩薩によって創建された仏教寺院、喜光寺へようこそ。喜光寺は奈良の東大寺との歴史的な関連性と、平安時代（794-1185）に作られた木造の阿弥陀如来像が安置されていることで知られている。また今日では蓮の花の境内と写経による精神統一のために多くの参拝者が訪れる。

この寺の創建者である行基は、仏教を説き、寺院を設立し、公共事業を行うために全国を旅した。721 年にこの寺を創建し、「菅原寺」と称した。748 年には聖武天皇（701-756）がこの地の行基を訪れた。伝承によると、聖武天皇が菅原寺の本尊に思いを馳せていたとき、本尊から神秘的な光が発せられるのを見たという。聖武天皇はその光景に感銘を受け、この寺に「喜光寺」という新しい名前を与えたという。

喜光寺の衰退と再生

1 世紀にも及ぶ戦国時代（1467-1568）は、内乱と広範な紛争に見舞われた時代であった。その時代に、喜光寺は火事の被害に遭い、本堂が失われた。本堂は 1544 年に再建されたが、1570 年代のさらなる動乱により、南大門を含む多くの寺院建造物が焼失した。

その後の 3 世紀に渡って喜光寺は徐々に再建されていった。しかし明治時代（1868 年～1912 年）の初期、喜光寺は政府による庇護を失い、ほぼ廃墟と化してしまった。喜光寺の

その悲惨な様子は、1921 年にこの地を訪れた歌人の會津八一（1881-1956）によって歌にされ、荒れ果てた境内を見て抱いた悲しみが表現された。

喜光寺再興への取り組みは 1990 年に山田法胤住職（1940 年生）が就任し、本格的に始動した。荒れ果てた寺の姿にとまどいながらも、法胤は寺院再興に乗り出した。写経会の収益金や現代の行基信奉者からの寄付金が修繕の資金となり、共同体意識が生まれた。復興のもうひとつの重要な要素は、蓮の花の栽培だった。何年もかけて少しずつ植えられた蓮の数は今では 250 を超え、喜光寺は「蓮の寺 」として知られるようになった。

今日、喜光寺は前進を続けている。2014 年には行基を祀るお堂が建てられ、2021 年には霊廟が建てられた。毎月 2 日には写経と法話の会が行われ、毎年 3 月 2 日には行基の命日を記念する祭礼が開催される。1,300 年以上前に創建された喜光寺は、今再び近隣の人々にとって欠かせない存在となっている。

南大門

この場所にある喜光寺の南側の門は、2010 年に喜光寺復興の取り組みの一環として完成したものである。高さ 12 メートルの門には、第一線で活躍している彫刻家、中村晋也（1926 年生まれ）が手がけた 2 体の仁王像がある。南大門の仁王像は、その間を通る人々の心を清める効能を持つと言われている。